

戦う少女のユニフォーム

——戦時中におけるセーラー服表象——

渡辺 友美

はじめに

洋画家であり、戦中は戦争画を制作したことでも知られる藤田嗣治の《千人針》(1937年)は街頭で千人針を縫う女性たちの姿が主題となっている(図1)。ここに描かれているのは当時の都市部の街角でしばしば見受けられたであろう、市民の様子である。そしてやはり印象的なのは、前景に配置された割烹着の主婦たちと、セーラー服の少女だ。

千人針を縫う場面のほかにも、割烹着の主婦やセーラー服の少女の図像は、モンペや男性向けに普及した国民服などと並んで、大衆メディアにおいて戦争に協力的な市民のユニフォームとして表出することが少なくなかった。

しかし戦後、学校制服の是非をめぐる議論が行われるようになると、女学生の制服として親しまれているセーラー服も海軍を連想させることなどから、つぎのように軍国主義の産物と非難の声が上がるようになった。



図1

女の水兵服はそのころの男尊女卑思想をそのまま、陸軍より一段下に見られた海軍の兵服を型取ったものである。軍国時代の遺物もいいところ（中略）学問の自由と個性の伸長を目指す大学にとって、制服は全く無用、というよりは一種の“敵”であろう。高校や中学の場合は多少大学と違うが、それでも軍服を着せる必要はないに決まっている¹⁾。

掲載誌の『世界』は左派の論調であることも考慮すべき点ではあるが、1960年代、制服論争は「春の風物詩」となっており、たとえば『読売新聞』は賛否いずれの主張も取り上げるなか、「特に、ツメえり、金ボタンの学生服は、明治維新の官軍の軍服に型取ったもの。女学生のセーラー服は、その名のように水兵服の変型だから、男女ともに軍国主義のにおいが強いというのも、精神的反対論の強力な根拠である」と紹介している²⁾。

こうしたセーラー服を軍国主義に結びつける傾向は、野坂昭如によるルポルタージュ風の小説「好色萬載集 第一話・セーラー服縁起」にも表れている。主人公、庄助はひどくセーラー服を着た女子学生を崇拜している。その誕生のルーツを突き止めようと学生服の生産が盛んな岡山県に赴くと、偶然地元の女子学生たちが街を案内してくれることになる。ところがその女子学生たちが自身のセーラー服を「単なる作業着」と捉えていることに庄助は「この世の中で、もっとも香しく、清純な衣裳と信じこんで、ただだからこそ永遠の想いを寄せていたセーラー服が、実は、当節の殺伐たる女性産み出した元凶らしいのだ（ママ）」と急に興ざめをしてしまう。そして自らに言い聞かせるように、セーラー服は「無敵海軍の雄姿」と重ね合わされた、「軍国主義と表裏一体」のものであると、嫌悪感さえ抱くようになっていく³⁾。

しかし、先行研究によって明らかになっているセーラー服の歴史に目を向ければ、日本の女学生のセーラー服が軍国主義の産物であるという認識が誤っているという指摘⁴⁾は妥当である。その一方で、この装いが戦時中にも完全に排除されることなく存続した背景のひとつとして、少なからずメディアを通して時局に迎合したイメージが形成されていたことも否めない。

本稿では、日本の少女が着用していたセーラー服が戦時中、海軍の軍服とはまた異なった文脈のなかで、愛国心や軍国主義を示すものとして機能したその諸相を明らかにしたい。

日本の女学校におけるセーラー服の導入過程については、これまでに複数の研究者によって詳細な検討が行われている。しかし大衆メディアにおける視覚

的な資料を対象とした、そのイメージの変遷に関する考察の余地は多分に残されているといえるだろう。また、モンペや割烹着、国民服といった戦中に存在感を放っていた衣服に関する研究はあるものの、同時代に同じくアイコン的な服装であったセーラー服にまつわる表象についての考察は、十分に行われているとはいえない。そこで、主に 1930 年代後半以降の戦時中において主に女学生によって着用されたセーラー服のイメージの問題について、モンペや割烹着などの衣服と適宜比較をしながら再考を行う。戦中と戦後におけるそれぞれのセーラー服のイメージを断絶されたものと見なさずに、また軍国主義を示す服であったか否かという単純な二項対立として捉えることなく、その両義性に着目しつつ、検討を行っていきたい。

1. 日本の女子教育におけるセーラー服の導入

まずは先行研究において明らかになっている、日本の女子教育におけるセーラー服の成立過程を簡単に整理しておこう。

最初期のセーラー服の導入は、体操服としてであった。これは教育者である井口阿くりが留学先の米国で、女子学生が着用していた服装を日本の女学校でも用いることを提案したことがきっかけである⁵⁾。

ちょうど 20 世紀初頭の米国では、女子学生の通学服として、「ミディ」と呼ばれるセーラー服のファッションが流行していた。すでに 1870 年代末にはボート競技のチーム用にセーラー型のユニフォームが採用されており、これは女子教育の場における初期の例といえるだろう⁶⁾。ここに米国海軍との直接的な関係性は認められず、当時の欧米で流行していたファッションを取り入れたと考えられる。20 世紀に入ると、バスケットボールなどのスポーツのユニフォームとしてだけでなく、通学用の服装としても広がりを見せるようになる。この頃の少女たちは「アメリカの女子学生の制服といってよいほどのもの」になるまでにミディを着ていたという⁷⁾。主に 1910 年代から 20 年代にかけて販売されていたミディのブランド名には、米国海軍の人物名などを冠したものが複数見受けられるようになる⁸⁾。またそれだけでなく、米国の少女たちにミディが普及した背景として、米国海軍兵学校の衣服の余剰を活用したと広告で謳われることもあった⁹⁾。この広告で示された経緯は慎重に検討する必要があるが、企業が海軍のイメージと関連づけて商品を展開していた事例があることは留意すべき点であろう。

井口が提案した運動服の形状は、1905年の『婦人画報』に掲載された女子高等師範学校の女学生たちの写真からもうかがい知ることができる（図2）。しかしこの運動服は、女子高等師範学校などごく一部の女学校でのみ着用されるにとどまっていた¹⁰⁾。

そしてその後の1920年、平安女学院がワンピース型のセーラー服を採用し¹¹⁾、翌年の1921年には愛知県の金城学院や福岡県の福岡女学院が、現在でも一般的なツーピース型のセーラー服を採用した¹²⁾。金城学院では校主事務取扱であったチャールズ・A・ローガンの娘が着用していたミディがモデルとなり、1921年の9月から制服として制定された¹³⁾。福岡女学院では、当時校長であったエリザベス・リーが来日前に教鞭をとっていた、ペンシルベニア州にあるシッペン・スクールの学生たちの服装や、自らが所有していたミディを手本に導入された。この評判は広がり、日本各地から制服の見本の請求があったという¹⁴⁾。このように、女学校におけるセーラー服は米国に強く影響を受けているのだ。ここで強調しておきたいのは、女学校の制服の導入に関しては、海軍のセーラー服とは直接的な関係がないということだ。日本の海軍においては1870年10月、「海軍ハ英吉利式¹⁵⁾」に倣うよう政府から通達があり、その2年後の1872年には海軍省の「中等士官以下服制」にて「フロック則チ方今用フル所ノ水火夫服¹⁶⁾」と記載

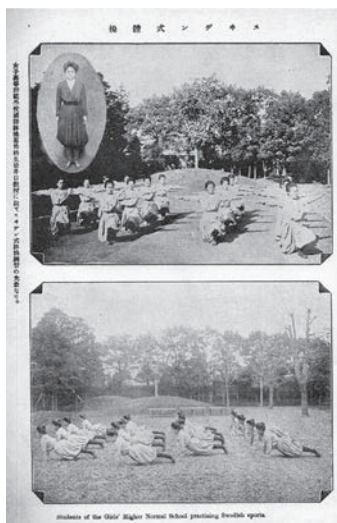


図2

され、セーラー服が常服として定められたことがわかる。

2. 平和な時代のセーラー服表象

日本における高等女学校への進学率は上昇傾向にあったものの、1925 年からの 10 年間は約 15% の横ばい状態が続き、1940 年の時点でも 20% には達していない¹⁷⁾。このデータからも、女学校は当時の 10 代の少女に広く開かれていたとは言い難い。こうした限られた枠組みのなかではあるものの、セーラー服は 1930 年代に入ると、ジャンパースカートと並んで各地の女学校にて制服として定められる事例が増加したという¹⁸⁾。この時期は、女学生を示す衣服として、セーラー服の存在感が高まりはじめた頃とみてよいだろう。

また女学生の制服という印象の強いセーラー服であるが、尋常小学校の女子児童の通学服としても広く着用されていた。女子児童向けのセーラー服は女学生の制服と基本的には同じ形で、1930 年代以降に増加の傾向がみられるという¹⁹⁾。百貨店も新学期のシーズンに合わせて、「セーラー型女児通学服」といった名称でその販売に力を入れていた²⁰⁾。

セーラー服姿の女学生は少女雑誌を中心とした出版物や広告、映画などの大衆メディアにおいても、次第に多様なイメージが形成されていくようになるが、その流れのなかでセーラー服の少女を表す言葉として「制服の処女」というものが散見される。

その由来となったレオンティーネ・ザーガン監督のドイツ映画『制服の処女』（原題：*Mädchen in Uniform*）は全寮制の女学校を舞台にした作品で、『キネマ旬報』では 1933 年の「優秀映画」外国映画部門にて首位に選ばれるなど、大変な人気を博した²¹⁾。劇中で少女たちを抑圧するものとして表されている制服はセーラー型のデザインでこそないものの、女学校や制服という要素がモチーフとなったこの作品から連想されるイメージは、日本国内における大衆メディアにも影響を及ぼしていた。たとえば、1935 年 3 月の映画館プログラム裏面に掲載された、平尾賛平商店の化粧品「レートメリー」の広告を見てみよう（図 3）。そこには「学園處女（せいふくのミス）はメリーが大好き！」というコピーとともに、セーラー服姿の女学生がヴィジュアルに起用されている。

1936 年にはザーガン版の翻案として、日活から『嫁入り前の娘達』という作品も製作された。現存する映画館プログラムや映画雑誌に投稿された批評から、



図 3



図 4

内容の断片をうかがい知ることが出来るが、原節子をはじめとする女学生の衣装にはセーラー服が用いられていた。日本で形成された「制服の処女」像とセーラー服には切り離すことのできない関係性がみてとれるのだ。

また、教育社会学者の稲垣恭子によれば、女学生には将来の良妻賢母や、芸術に親しみ教養のあるモダンな女性、そしてロマンティックな感性を持った少女といった、多層的なイメージが伴っているという²²⁾。実際に当時のメディアに目を向けてみると、稲垣が論じた内容は、しばしばセーラー服姿の少女の図像にも認められる。たとえばセーラー服姿で家事をする少女のイラストには良妻賢母になることへの期待のまなざしを見出すことができ(図4)、キャンバスに向かい絵画を嗜む様子からはモダンなセーラー服の少女像が示されている(図5)。これらの図像は大日本雄弁会講談社の『少女倶楽部』に掲載されたものであり、同誌は当時発行されていた少女雑誌のなかでもとくに多くの読者を獲得していた²³⁾。そして女学生とロマンチズムが結びついた好例といえ、実業之日本社の『少女の友』での活躍で知られる中原淳一によるイラストであろう。同誌の1938年5月号の付録「女學生譜」は中原のイラストと西條八十による詩で構成された小振りの冊子であるが、そのなかには制服への愛着をきわめて感傷的に表現した一編「制服を唄ふ」が収録されている(図6)。



図 5



図 6

新入学のよろこびに 高鳴る胸を、晴れやかに、包みし制服よ、一微笑みて 母も眺めき、その朝。^{あした}

若葉かゞやくバルコンに 肩くみあはせ、亡き友と、仰ぎし空の白き雲、その想ひ出も残る制服。

修學旅行のたそがれに 山の小徑を師の君と 辿りしときに、美しき 月は照らしぬ、この袖を。

乙女の涙も喜びも、やさしく秘めし紺の制服、襷にアイロン掛けるとき ああ、想ひ出の香の匂ふ。

和服の少女が胸に抱いたセーラー服は、学生生活の記憶が凝縮された特別な衣服としてシンボリックに語られている。しかしこのような状況も長くは続かず、次第に市民の生活においても戦時色が強まる中、セーラー服に平穏な少女の日常を見いだすことは難しくなっていく。

3. 日中戦争開戦以降のセーラー服に対する世論

昭和初期のモダンな少女の装いとして大衆メディアを彩っていたセーラー服であったが、日中戦争の開始とそれに伴う国民精神総動員が提唱されはじめた1937年頃を境として、その風向きは変わることとなる。時局を考慮した上でセーラー服は不経済的だという理由から非難の対象とされたのである。

たとえば、女性運動家として知られる山川菊栄は1937年8月30日の『読売新聞』にて「欠点だらけ 女学生の制服」という題で、セーラー服のデザインは可愛らしいが、日本の夏の気候に適さず、布が多く使われていることなどから不経済な点が多いということ述べている²⁴⁾。

1938年になると繊維を軍需品へ優先的に利用するために、民間における綿製品の製造販売が禁止されるだけでなく²⁵⁾、小学校、青年学校、中等学校の制服や制帽の新調を禁じ、有り合せのものを着用するようにという通達が文部省より発せられるなど、市民の服装にも時局の影響が及びはじめた²⁶⁾。新聞紙上などでは非常時における服装の在り方についての話題がしばしば提示され、先の山川菊栄の記事にとどまらず、セーラー服の是非を問うような議題が上ることもあった。たとえば家政学者の成田順は「若さと喜びの誇り セーラー服女学生 さて長短いづれが多いか」というトピックにおいて、山川ほどに否定的な姿勢を見せていないものの、やはりスカートの襲に関しては削減の余地があろうと語っている²⁷⁾。

節制の風潮が高まる中、実際に富山県の学校ではセーラー服の着用を禁止する動きがあったようだ。「セーラー型はそもへアメリカ・フラツパーが水兵生活にあこがれて真似たもので、優美、衛生、経済、便利の點からいつて新時代の女學生にふさはしくないといふ意見が女學校長會議で勝ちを占めた結果で、ダブル折襟型がこれに代」わることになったという²⁸⁾。ところがこの「優美、衛生、経済、便利」という点は米国の女學生向けセーラー服の広告においてキーワードとなっていたものであり²⁹⁾、これらの長所は日本の女學校に制服として採用された理由にも通じている。1920年代の欧米における活動的な女性であるフラッパーが抱いた水兵への憧憬に由来しているという説は信憑性に欠けるものの、女學生のセーラー服が米国経由のものであったという認識がなされていることは注目し得る。対米関係は1940年以降に屑鉄の対日禁輸措置がとられるなど、本格的に悪化しはじめることを踏まえると³⁰⁾、そうした反米感情と結びつい



図 7

たものではなく、外国の華奢な装いへの反発と捉えるのが妥当であろう。

このようにセーラー服への風当たりが強くなる一方で、「非常時」に適した形に改良されたタイプのセーラー服も登場するようになる（図7）。「制服統一の運動は纏て民族統一運動に迄伸展してゐるかに見える」というなか、「鐘紡報国服」という名称で登場した制服は、一見すると一般的なセーラー服であるが、襟の裏に畳み込まれた布を広げると頭巾になり、「スカートの裾の紐を絞るとモンペ式になつて防空、防火作業等に自由に活動出来る」という³¹⁾。これがどの程度実用段階に至ったのかは調査の余地が残されているものの、セーラー服のデザインの特徴を極力留めようとする動きの一例ととらえることができるだろう。

襟やスカートの襷に余分に用いる布が不経済ではないかといった意見こそ上がっていたものの、統一的な服装を望む声が強くなるなかで、セーラー服が女学生の制服を象徴する存在だったという事実は、その存続に有利にはたらいだ。そして、この時代に求められていた全体主義的なイメージを図らずも内包していたセーラー服は、銃後を守る少女像に合致し、戦争に協力的な文脈においても頻繁に表れることとなる。

4. 軍国少女としてのイメージ

先ほど言及した藤田の作品のような、千人針を縫うセーラー服の少女というモチーフは、『少女倶楽部』昭和12年10月号「ヨット鉛筆」の雑誌広告のカットにも認められる（図8）。コピーはなくイラストのみの構成であるものの、千人針とは直接関係のない鉛筆の広告にも、戦争への協力を促すようなイメージが及んでいた³²⁾。同様に、慰問袋や慰問文を製作する姿は愛国的なセーラー服の少女の典型である³³⁾。

銃後を守る女学生たちを主人公にした演劇や映画作品も散見され、現在では鑑賞することが叶わないものも多いが、残された広告や映画雑誌の記事などの資料からはその一端をうかがい知ることができる。日中戦争が始まった1937年7月以降、戦争関連の映画が競うように製作され、劇場公開に必要な検閲の件数も急増したという³⁴⁾。

1937年12月に東宝より封切られた『愛国六人娘』は「非常時日本の若き女性群と少年航空兵を描いた愛国映画³⁵⁾」であったようだ。「こゝには銃後を守つて第二の母性たる女学生の時局に對する覺悟が、歌と若さのリズムとなつて大空に響き渡る……³⁶⁾」という宣伝文や、映画公開にあわせて発表された同タイトル



図8

の楽曲には「銃後の護りよ いざ諸共に 盡すわれらは 祖国の乙女³⁷⁾」という一節があり、揃いのセーラー服に身を包んだ6人の女学生の姿が、スクリーンを通して観客に軍国少女のイメージを示したことは想像に難くない(図9)。この『愛国六人娘』は、盧溝橋事件からちょうど2年が経過した1939年7月7日に「聖戦二周年³⁸⁾」として上映された東宝映画のプログラムにも組み込まれており、こうした機会を通じてそのイメージが反復されたといえよう。

『軍国女学生』は1938年5月に宝塚少女歌劇の演目として発表されたのちに、映画と演劇を組み合わせたキノドラマという形式でも同年に上演されている。海軍省軍事普及部による提供という点からも、プロパガンダ性の強い作品であるが、「従来の軍国レヴユウと異り、銃後女学生の赤誠の發露を實話について構成したもの³⁹⁾」で、戦線の兵士ではなく、銃後にスポットライトを当てた点を特色としていた。

同タイトルのレコード音源には「行け 男の子等よ 我も亦 立ちて薫らむ 國の華」というフレーズが繰り返し登場し、「銃後を守る 我がつとめ」という女学生に求められた役割が歌詞に組み込まれている⁴⁰⁾。

キノドラマ版の謳い文句には「海軍士官と海の荒鷲を兄に持つ二人の女学生、その二人を圍む制服の處女たちが、愛國の意氣に燃えて振ひ立つ⁴¹⁾」とあるが、そこにかつてのレートメリーの広告に示されたような「制服の処女」である少女



図9

個人の有する清らかさを見出すことは難しい。純粹性という少女の記号は全体主義的な国家の高潔さへと結びつけられていくようになる。「制服の処女」あるいはそれを意識した言い回しは、戦争に協力的な少女のニュアンスを含ませることで、戦中にも好んで用いられた。

また『少女倶楽部』1938年5月号に掲載された水島あやめによる短編小説「制服の聖女」というタイトルも明らかに「制服の処女」を意識しており、感傷的なストーリーながらも銃後を守る献身的な少女の美談が語られている。挿絵は人気を博していたイラストレーターの一人である高島華宵によって描かれており、かつて流行した映画を意識したタイトルが示すように、セーラー型の制服を着た女学生に内包されてきた純粹さという表象は国家に貢献するための要素に結びつけられている。

さらに、日本国旗とセーラー服の少女という組み合わせも見過ごすことはできない。『少女倶楽部』1938年5月号の口絵には天長節（天皇誕生日の旧称）に、セーラー服の少女が日本国旗を手に、出征している父親に想いを馳せる様子が加藤まさをによって描かれている（図10）。これまでにみたような銃後を守る少女像に国旗が並置されることで、より直接的に愛国的なイメージに結びついている。

内閣情報局発行のグラフ誌『写真週報』1938年11月9日号に掲載された読者からの投稿作品では、日の丸を掲げるセーラー服の少女たちの写真が目をひく（図11）⁴²⁾。プロパガンダとしての側面が強い媒体であることは考慮が必要であ



図10



図11

るが、雑誌や映画において形成された愛国的なセーラー服の女学生というヴィジュアルは現実の光景としても切り取られ、流通していたのである。同号は漢口陥落を祝したイベントに集う市民の姿も伝えているが、セーラー服の女学生が足並みを揃えて行進する姿や、俯瞰のアングルから一斉に札する姿をとらえた写真からは、銃後を守るユニフォームの画一性が、個のない集団性を際立たせていることを読みとることができる（図12）⁴³⁾。

こうした図像は、1940年を通して全国的に催されていた、皇紀2600年を祝う行事の光景にも認められる。無数の日の丸とセーラー服がひしめく皇居前の写真には、「天皇陛下萬歳を力強く叫ぶ女學生たち⁴⁴⁾」という一文が添えられ、統率のとれた群衆の印象を強く与えている（図13）。

また、セーラー服に身を包んだ少女たちは、必ずしも学生であったわけではない。1937年の建国祭でのパレードにはセーラー服姿の「女工さん」の姿がカメラに収められている（図14）。このキャプションが正しいとすれば、学校制服の枠組みを超えた愛国的な「衣装」として、この後に言及する割烹着と並んで、少女向けのセーラー服が機能していたと捉えることができるだろう。



図 12



図 13



図 14

5. 銃後の「軍服代用の制服」

銃後を守ることが女性に求められるなかで、セーラー服に限らず統一的な服装に身を包んだ市民の姿は、国家へ奉仕する愛国的な集団というイメージを大衆に与えるのに格好の主題となった。

セーラー服と同様に銃後の女性を象徴していた服装として、割烹着も看過することはできないだろう。とりわけ国防婦人会の割烹着にたすきを掛けた装いは、戦争に協力的な女性の「軍服代用の制服⁴⁵⁾」として定着していた。

割烹着の考案については諸説あるものの、明治期に上流家庭の子女が通う料理教室にて考案されたものといわれており、大正から昭和にかけて、木綿が安価になるとともに庶民にも普及したという⁴⁶⁾。

それでは、なぜ家事をする際に用いられる割烹着が国防婦人会のアイコンとなったのだろうか。国防婦人会は大阪の主婦たちが出征する兵士を見送る際に駅や港でお茶出しなどのボランティアを行っていたのが始まりで、1932年3月に新聞社や警察の後援と、軍部による指導で大阪国防婦人会が発足し、早くも同年10月には全国的な組織である大日本国防婦人会へと規模が拡大した⁴⁷⁾。その大阪の主婦たちは割烹着姿であったが、以降も割烹着を身につけ奉仕活動を行う姿が市民に受け入れられ、正式な会服になったという⁴⁸⁾。「着替える間もなく台所から飛び出してきた」といった献身的な奉仕の姿勢が表れていることや、統一的に割烹着を着ることで、他者との着物に対する競争心を生じさせないことも支持の理由であった⁴⁹⁾。主婦たちにとって「家」という、彼女たちが押し込められていた旧来の場の外で、女性も戦争に協力することのできる活動の場が与えられたことを視覚的にも表していた。「銃後婦人の緊張と活躍を象徴させたもの」とまで謳われた割烹着であったが⁵⁰⁾、防空演習などの活動には適さないといった実用的な側面から、批判的なまなざしが向けられることもあり、銃後婦人の服装は次第にモンペへと移行することになる⁵¹⁾。

割烹着が主婦たちの「軍服代用の制服」であるならば、セーラー服は銃後を守る少女たちの「軍服代用の制服」として、メディアを通して表出したといっただろう。ただし、そのような文脈で表れた少女のセーラー服がある意味での「軍服」であったとしても、たとえば先ほど触れた米国の女学生の通学服や日清・日露戦争時における男児用セーラー服⁵²⁾のように、海軍との接続性を持たせて国威高揚の文脈に組み込まれるという例はあまり見受けられない⁵³⁾。

繰り返しにはなるが、少女のセーラー服は日本の女学校に制服として採用された当初から、海軍の水兵の服装とは直接的な関係が無い。本来のセーラー服が有する海軍の制服であるという要素が強くアピールされることはなく、あくまでも銃後の少女として国に貢献する姿が期待されているのである。

先に述べた『少女の友』の人気イラストレーターであった中原は、彼の描く少女が「健康な強い少女ではなかつた」として、軍部の圧力により1940年6月号

のセーラー服姿の少女の表紙を最後に、同雑誌からの降板を余儀なくされたことは広く知られている⁵⁴⁾。平和な時代のセーラー服を象徴するような中原のイラストが誌上から撤退した一方、セーラー服は健康で理想的な少女の身体を包む衣服として機能することで存続していく。しかしその着用スタイルは時局の影響を受けて変容を遂げる。戦争に協力的な女性の服装であった割烹着が、活動性の側面から次第にモンペへと移り変わったように、主にプリーツスカートと組み合わせられて着用されていた女学生のセーラー服も、モンペとともに着用されることが多く見受けられるようになっていった。

6. 「戦闘服」化するセーラー服

モンペとはもともと農村部の女性たちの活動着であったが、防空演習など活発な動きが求められる場で着物の裾が広がることを避ける目的から都市部の女性たちにも広まっていった⁵⁵⁾。モンペ姿の女性は1930年代後半以降、戦争に協力的な存在として頻繁にメディアに現れるようになる。モンペ姿は当初、都市部の女性の戦争協力的なアイコンとして取り上げられていたが、次第に地方の農村部の女性たちこそ「報国的」な存在へとシフトしていったという。その背景には都市における消費文化が個人主義的として問題視されたのに対し、男性不足を補い労働に勤しむ、農村部の女性の恭順な姿勢を賛美する傾向があったのだ⁵⁶⁾。1940年12月の『少女倶楽部』では「興亜の少女たち」というキャプションとともに、セーラー服にモンペ姿で鎌を片手に農作業に従事する少女の写真が確認できるが、少女もこのように労働する姿が求められはじめていた（図15）。

『アサヒグラフ』も「モンペ姿の簡素美」と題し、秋田と長野の女学生のモンペ姿を取り上げている⁵⁷⁾。セーラー服にモンペ姿の秋田高女生の全身写真には「きりッと引きしまつて寸分の間もない服装」とキャプションが添えられ、そこにかつてのような無邪気な乙女の表象を見出すことは難しい（図16）。地方の女学校では1942年後半頃から、制服のスカートをモンペに変更するところが増加したという⁵⁸⁾。

1941年1月には文部省により、学生が制服を新調する際には国が指定したデザインのものに限るという旨の通達が発された⁵⁹⁾。女生徒には丸みを帯びたヘチマ襟の制服が定められるが、通達には進学前の学校で着ていたものを引き続き着用したり、兄妹のお下がりを着たりすることで可能な限り制服を新調しないこ



図 15



図 16

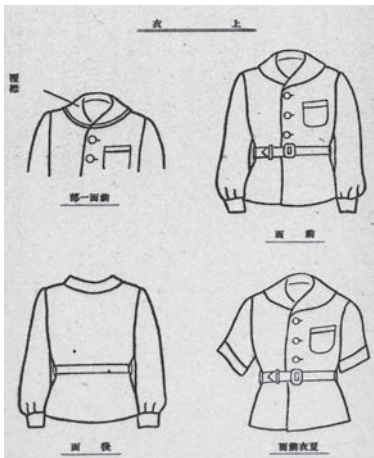


図 17



図 18

とが併記されており、セラー服が姿を消すには至らなかった（図 17、図 18）。当時は小学生の間にも制服ではないものの、女学生とよく似た形のセラー服がある程度普及していたことから、引き続きそれを着る者もいたと考えられる⁶⁰⁾。

しかしこうした逆境に置かれながらも、セラー服が根強く生き残っていた背景には、少女たちのセラー服に対する憧れや愛着のほかにも、セラー服あ

るいはそれをまとった少女が時局に適応した形でメディアに表出していたという要因があるのではないだろうか。そしてその傾向は戦況が悪化しても続いていくこととなる。

1942年には衣服にも配給制度が適用されるなど、国民を取り巻く衣服の環境は日々厳しくなりつつあった⁶¹⁾。そうした状況下、同年の4月28日から6月2日にかけて、芝公園の赤十字博物館にて「戦時被服展覧会」が開催された。「この際国民の被服生活に根本的検討を加へて戦時體制化し、以て國策に順應せしむること」が急務と掲げられたこの展覧会は、国民服や婦人標準服をはじめとする模範的な装い、また物資を節約した被服に関する資料を展示し、国民を「啓発」することを目的としていた⁶²⁾。会場で講演を行なった専門家には、成田順や大妻コタカといった女子教育者も名を連ねるなど、ひと月ほどの会期ながらも本格的なイベントであったことがうかがえる。

女学生の制服に関しては、前年に定められたヘチマ襟の標準服が「女子中等学校制服」として展示されていたようだ⁶³⁾。その一方で、注目したいのは「和洋服の心肺機能に及ぼす影響」と題された、洋服と和服それぞれの服装で運動した際に身体へかかる負荷を比較したパネル群において、洋装を示すイラストにセーラー服の少女が起用されていることだ（図19）。血圧、呼吸数、脈拍などを計測した数値を提示することで、洋服の機能性を訴えるこの資料からは、セーラー服の利点を再確認させる役割を果たしたのではないだろうか。

また、国民学校の女子児童を対象とした「時局下に於ける國民學校女子服」の形状は、襟の形状や、胸元のスカーフ、白いラインなどの特徴からもセーラー服を強く意識していることがうかがえる（図20）。「衿が非常の場合に直ちに帽子及マスクに」なり、キュロットスカートのような下衣の裾を紐で縛ることで、動きやすさを向上させることができるこのデザインや機能は、先ほど言及した「鐘紡報国服」をも想起させる。

このように展示資料にセーラー服やそれに準じたものが認められることは、戦時中に適した衣服を国民に向けて「啓発」する目的で催された展覧会においても、セーラー服を排除しようという姿勢はみられず、むしろ依然として肯定的に捉えていたことを示しているといえるだろう。

同年1942年には「これからの制服は資材と融通とを問題として考案さるべきもので、女学校の制服として廣く採用されてゐる水兵服の如きものは考へものである⁶⁴⁾」という声が教育者から上がっていたように、相変わらずセーラー服に対する批判的な意見はあった。ただしこの意見は反米英的な感情に基づいてはい



図 19



図 20

ない。しかし、次第に「鬼畜米英」という言葉が頻繁にメディアに表れるようになるなかで、この二国との縁が深いセーラー服は敵対感情に基づいた非難の対象にはならなかったのだろうか。これに関しては敵性語の観点などからも調査の余地が残されているものの、たとえば、実際にミッション系の女学校の生徒が着用していたセーラー服にあしらわれていた星のマークが米国を想起させるものとして周囲の冷たい目線が向けられたケースがあったという⁶⁵⁾。また、日本海軍兵の活動を紹介した資料には「遺憾ながら今は憎つき敵のイギリス海軍がその元祖をなしてゐる」という記述があるが、しかし一方で「實際水兵服はどう見ても可愛い」と、そのデザインを高く評価している⁶⁶⁾。これは海軍の服装という文脈ではあるものの、太平洋戦争中にセーラー服の元祖を英国と認めた上で肯定的に捉えた例として注目に値するだろう。

労働力の不足が深刻になる中、1943年には工場などでの勤務を行う女子挺身隊の結成が定められる。翌年8月に発された女子挺身勤労令は法的拘束力が伴うもので、12歳以上の女子が動員された⁶⁷⁾。このような状況下においても、セーラー服にモンペを履き兵器の製造に励む少女の姿が散見される。隊員は「戦ふ女性達」であり、「一刻の作業が直接戦線とつながつてゐるといふ意識」を持っているという(図21)⁶⁸⁾。挺身隊員が作業にあたる工場が戦場であるならば、少女たちのセーラー服は戦闘服とみなすことができるのではないだろうか。

日中戦争の頃には慰問文や千人針の制作といった活動であったものが、農作業への従事、さらには女子挺身隊への動員へと、戦況が厳しくなるにつれて銃後の少女に求められる貢献はよりアクチュアルなものへとなっていった。ここに



図 21

は愛国的な少女を示すセーラー服が、戦闘服化する流れがみてとれる。スカートからモンペになっても、セーラー服の少女たちの「軍服」性は変わらず、むしろリアルに「戦う」姿がメディアを通じて報じられることで、セーラー服は戦闘服としての側面を強めたといえる。実際には挺身隊員の技術は熟練にはほど遠く、戦局への効果がいまひとつであったとしてもだ。

また、モンペを伴っておらずとも、セーラー服は戦う少女の身体を包み続けた。『少女倶楽部』の1938年11月号から1945年8月号までの表紙絵分析を行った中川氏は、戦時中の食糧難において女子の平均体重も減少傾向をたどるなか、表紙に描かれた少女は依然として発育の良い体つきであることを指摘している⁶⁹⁾。たとえば商業美術家であった多田北鳥による1944年1月号の表紙絵は、血色の良い健康的なセーラー服の少女が「米英撃滅」と書き初めをする、非常に直接的な表現が印象的だ(図22)。同雑誌の表紙を多数手がけていた多田であったが、情報局より「こんな絵は、これから使わないようにしてほしい⁷⁰⁾」と告げられ、この号を最後に降板することとなった。その具体的な問題点は明示されていないものの、表紙の少女は「上品でやさしげ」であり、戦意高揚にならないために降板に至ったという指摘もあり⁷¹⁾、少女の服装が要因であったとは考えにくい。実際に、多田の降板後もセーラー服の少女は表紙に引き続き描かれた。一例として、1944年10月号の三輪孝による表紙絵は多田とは画風が異なるもの



図 22



図 23

の、より時局に即した形で国に貢献するイメージが形成されている（図 23）。これらの表紙絵は少女の上半身のみ衣服が判別できる構図であり、戦局が悪化していき実際の少女たちが痩せ細っていく状況のなかで、健康的な体型のセーラー服少女はより理想的で望ましいものとして描かれ続けたといえるだろう。

おわりに

少女文化を専門分野とする嵯峨氏は先行研究において、1938 年に東京の女学生たちが行なった制服調査について考察をしているが、そこには統制が厳しくなりつつある状況下において、学校ごとに特色ある制服の詳細な記録を残すことでの「動員体制への抵抗」が読み取れると論じている⁷²⁾。また日本近代史学者の刑部氏は、モンペやズボンの着用を強いられる中で女学生たちは「せめても上着だけはセーラー服を着たいと思った。その思いで上着のセーラー服にズボンまたはモンペという折衷された姿となっていたのである」と述べている⁷³⁾。確かに服装統制後にもセーラー服を着続けることには、物資の節約を考慮したという点だけではなく、ヘチマ襟の制服に対する「抵抗」と考えることもできるだろう。モンペやズボンが「軍国主義」なのであって、スカートとともに着用され

るセラー服は、「戦争が始まる前の平和な時代の女子生徒の憧れの姿であった」というように⁷⁴⁾、確かに戦争の影から遠いところで、セラー服姿のモダンな少女たちの文化が花開いていたことも事実である。

しかし、スカートと合わせて着用されていた頃から、献身的で戦争に協力的なセラー服の少女像が形成されていたのであり、それ故に戦争末期においても、敵国の服装として完全に排除されることはなく生き残り続けていた。たとえ「抵抗」としてセラー服を着ていたとしても、少女たちの画一的な服装が日中戦争以降に銃後の「軍服」と見なされ、愛国的なイメージが蓄積されていった背景を踏まえれば、セラー服が戦闘服としてプロパガンダに表出したこともまた事実なのである。

セラー服は標準服へ「抵抗」する少女の戦闘服であったのと同時に、国家に「恭順」する少女の戦闘服としてメディアに表出していたのだ。

割烹着が国防婦人会のユニフォームとして意識的に軍国主義の文脈に組み込まれた経緯とは異なり、セラー服は水兵の軍服が元祖ではありながら、海軍とは距離のあるところで少女の日常に根付きつつあった。言うなれば、ニュートラルな洋装であった。しかしその視覚的な統一性は戦中のメディアが求めている銃後の市民像にも迎合することとなった。だからこそプロパガンダにも用いられ、愛国的な戦う少女のユニフォームというイメージも創出されたのだ。物資節約が掲げられ、セラー服に対する風当たりが強くなる一方で、国家に協力的な銃後の少女像を形づくるのに欠かすことのできない衣服であった。着用する少女の意思とメディアが描くセラー服の少女像は交錯していた。両義的な表象を内包した少女のセラー服は、戦中の動乱に翻弄されながらも、交錯した需要のためにその姿を消すことはなかった。メディアを通して戦争に協力的な衣服という位置付けが明白だった割烹着やモンペが過去の産物となってしまったのとは対照的に、セラー服は現代に至るまで少女たちのユニフォームであり続けている。

注

- 1) 斎藤正躬「軍服を着た学生」『世界』1960年4月号、159頁。
- 2) 「学生服論争」『読売新聞』1964年4月19日、朝刊19頁。
- 3) 野坂昭如「好色萬載集 第一話・セラー服縁起」『小説新潮』1973年4月号、382-394頁。
- 4) 刑部芳則『セラー服の誕生』法政大学出版局、2021年、305頁。
また、戦中の女学生の制服に関する研究は以下の論文に詳しい。

- 刑部芳則「日中戦争と太平洋戦争における高等女学校の制服：セーラー服と文部省標準服」『総合文化研究』24 巻 1・2・3 号合併号、2019 年 3 月、324-295 頁。
- 5) 高橋一郎ほか『ブルマーの社会史：女子体育へのまなざし』青弓社、2005 年、73 頁。
 - 6) Patricia Campbell Warner, *When the Girls Came Out to Play The Birth Of American Sportswear*, University of Massachusetts Press, 2006, p.p. 177-178, 183.
 - 7) Estelle Ansley Worrell, *Children's costume in America, 1607-1910*, Scribner, 1980, p. 192.
 - 8) この時代の *Vogue* や *Harper's Bazaar* といった婦人雑誌にはさまざまなブランドのミディの広告が散見され、たとえば Jacobs Bros. Co., の Bob Evans Marine Tog は、南北戦争や米西戦争で活躍したロブリー・D・エヴァンス (Robley D. Evans, 1846-1912) という海軍少将の愛称が商品名となっている。*Vogue* の 1920 年 7 月 15 日号 86 頁に掲載された広告にはエヴァンスの肖像画を眺めるミディ姿の少女たちが認められる。また、18 世紀の独立戦争における英雄として知られる海軍の軍人ジョン・ポール・ジョーンズ (John Paul Jones, 1747-1792) の名に由来した Morris & Co., の Paul Jones Middy もその好例といえる。
 - 9) *Vogue*, New York Vol. 57, Iss. 9, May 1, 1921, p. 16b.
 - 10) 難波知子『学校制服の文化史 日本近代における女子生徒服装の変遷』創元社、2010 年、141 頁。
 - 11) 平安女学院中学校・高等学校、学院の歴史資料 (最終閲覧日: 2022 年 9 月 30 日) http://jh.heian.ac.jp/school_profile/academy_history
 - 12) 難波、前掲書、267 頁。
 - 13) 金城学院百年史編集委員会『金城学院百年史』金城学院、1996 年、212-217 頁。
 - 14) 古川照美、千葉浩美編『ミス・ダイヤモンドとセーラー服 エリザベス・リーその人と時代』中央公論新社、2010 年、53-54, 199-201 頁。
 - 15) 内閣官報局『法令全書 明治 3 年』内閣官報局、1887 年、372 頁。
明治初期の海軍服に関しては以下の論文に詳しい。太田臨一郎「海軍 (一) (近代日本軍服史 (3))」『被服文化』69 号、1961 年、70-76 頁。
 - 16) 海軍省『海軍制度沿革』巻 7、海軍大臣官房、1940 年、22 頁。
 - 17) 稲垣恭子『女学校と女学生 教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社、2007 年、6 頁。
 - 18) 難波、前掲書、267 頁。
 - 19) 難波知子「近代日本における小学校児童服装の形成—岡山県公立小学校を中心に—」『国際服飾学会誌』48 号、2015 年、45 頁。
 - 20) 一例として PR 誌『三越』の 1929 年 3 月号、1932 年 3 月号、1933 年 4 月号などに新学期向けに女子児童向けのセーラー服が認められる。
 - 21) 『キネマ旬報』1934 年 3 月 1 日号、34-35 頁。
 - 22) 稲垣、前掲書、2007 年、4 頁。

- 23) 中川裕美『少女雑誌に見る「少女」像の変遷—マンガは「少女」をどのように描いたのか—』出版メディアバル、2013年、58-59頁。
- 24) 「欠點だらけ 女学生の制服」『読売新聞』1937年8月30日、朝刊9頁。
- 25) 難波、前掲書、2010年、314頁。
- 26) 「物資ノ消費節約ニ関スル件」文部大臣官房文書課編『文部省例規類纂』（1938年）、92-93頁。嵯峨景子「昭和十三年の高等女学校制服調査にみる戦時下と制服」大塚英志編『動員のメディアミックス＜創作する大衆＞の戦時下・戦後』思文閣、2017年、235頁。
- 27) 「現代女性の服装百態 10 制服」『東京朝日新聞』1938年11月29日、朝刊6頁。
- 28) 「セーラー服禁止（富山）」『東京朝日新聞』1938年3月21日、朝刊10頁。
- 29) たとえば、*Vogue* 1920年9月15日号13頁に掲載された「ポール・ジョーンズ・ミディ」の広告には「長く着用し洗濯しても耐久性に優れており、美しさを保つことができるため、経済的である」といった旨の文が認められる。
- 30) 松井愈ほか著『戦争と平和の事典 現代史を読むキーワード』高文研、1995年、49頁。
- 31) 「国民服運動に應へて“女子報國服”新たに登場」『東京朝日新聞』1938年11月9日、朝刊6頁。
- 32) 長谷川潮『少女たちへのプロパガンダー『少女倶楽部』とアジア太平洋戦争』梨の木舎、2012年、54-56頁。
- 33) 戦中の『少女倶楽部』の表紙絵を分析した中川氏は、「兵士の慰問が、「銃後の少女」の重要な役割とされていた」と指摘している。中川、前掲書、92-93頁。
- 34) 加藤厚子『総動員体制と映画』新曜社、2003年、38-39頁。
- 35) 『サンデー毎日』1937年11月7日、26頁。
- 36) 『東京朝日新聞』1937年11月30日、夕刊7頁。
- 37) 『歌の慰問袋 昭和戦時歌謡大全集』テイチクエンタテインメント、2013年、18頁（歌詞カード）。
- 38) 『東京朝日新聞』1939年7月7日、朝刊9頁。
- 39) 『読売新聞』1938年6月23日、夕刊2頁。
- 40) 「少女歌劇 軍國女學生」『読売新聞』1938年5月10日、朝刊6頁。
- 41) 『エスエス』1938年7月号、105頁。
- 42) 「読者のカメラ」『写真週報』1938年11月9日、22頁。
- 43) 「旗の波」同上、6-7頁。
- 44) 『少女倶楽部』1940年4月号、7頁。
- 45) 「エプロン國防軍に女學生も参加」『読売新聞』1934年6月28日、夕刊2頁。
- 46) 身崎とめこ「戦後女性の着衣・割烹着と白いエプロン—分断される身体・連続する母性—」武田佐知子編『着衣する身体と女性の周縁化』思文閣出版、2012年、359-360頁。
- 47) 脇田晴子、林玲子、永原和子編『日本女性史』吉川弘文館、1987年、262-263頁。藤井忠俊研究会編『藤井忠俊著作集 2, 戦争と民衆史』不二出版、2021年、244-245頁。

- 48) 藤井忠俊、『国防婦人会 日の丸とカッポウ着』岩波書店、1985 年、66 頁。
- 49) 同上、66-69 頁。
- 50) 「非常時婦人の服装」『読売新聞』1937 年 9 月 9 日、朝刊 9 頁。
- 51) 藤井忠俊、前掲書、1985 年、69、196-197 頁。
- 52) 戦前の男児服としてのセーラー服に関する詳細は以下も参照のこと。渡辺友美「日本男児のセーラー服—明治後期から昭和戦中期、七五三における着着を手がかりとして—」『表象・メディア研究』12 号、2022 年、63-87 頁。
- 53) たとえば今和次郎は『家事の科学』1937 年 5 月号に寄稿した論考において「今日の女学生の上着であるセーラー服は、男子学生の服が陸軍の服のような詰衿なのに対して、海軍の服にしたというようなコントラスト」と述べてはいるものの、両者を対比させるに留まっている。
- 54) 遠藤寛子、内田静枝監修『少女の友：創刊 100 周年記念号：明治・大正・昭和ベストセレクション』実業之日本社、2009 年、326、355 頁。
- 55) 飯田未希『非国民な女たち』中央公論新社、2020 年、112-113 頁。
- 56) 同上、202-207 頁。
- 57) 『アサヒグラフ』1941 年 2 月 5 日、24-25 頁。
- 58) 飯田、前掲書、117 頁。
- 59) 「学校生徒ノ制服統制ニ関スル件」文部大臣官房文書課編『文部省例規類纂』1941 年、30-38 頁。
- 60) 刑部、前掲書、2021 年、288 頁。
- 61) 近藤止文『衣料切符制の話』高山書院、1942 年、1-2 頁。
- 62) 『赤十字博物館報』第 26 号、日本赤十字社、1942 年 9 月、4 頁。
- 63) 同上、111 頁。
- 64) 城戸幡太郎「学生と服装」『国民服』1942 年 9 月号、2-4 頁。
- 65) 刑部、前掲書、2021 年、295-6 頁。
- 66) 内田丈一郎『無敵日本海軍兵』鶴書房、1943 年、36-38 頁。
- 67) 大蔵省印刷局編『官報』5283 号、1944 年 8 月 23 日、276-277 頁。浅井春夫、川満彰、平井美津子、本庄豊、水野喜代志編『事典太平洋戦争と子どもたち』吉川弘文館、2022 年、79 頁。
- 68) 「敢闘する女子挺身隊」『アサヒグラフ』1944 年 6 月 28 日、5-7 頁。
- 69) 中川、前掲書、82-84 頁。
- 70) 社史編纂委員会編『講談社の歩んだ五十年（昭和編）』1959 年、514 頁。
- 71) 上垣渉、阿部紀子『『尋常小学算術』と多田北島：学びはじめの算数教科書のデザイン』、風間書房、2014 年、114 頁。
- 72) 嵯峨、前掲書、247 頁。
- 73) 刑部、前掲書、2021 年、298 頁。
- 74) 同上。

図版出典

- 図 1 Tokyo Museum Collection、藤田嗣治《千人針》(1937 年)(最終閲覧日:2022 年 12 月 7 日) <https://museumcollection.tokyo/works/6386937/>
- 図 2 『婦人画報』1 巻 1 号、1905 年、頁数記載なし。
- 図 3 東京宝塚劇場発行映画館プログラム、1935 年 3 月 28 日、広告頁。
- 図 4 「少女物知り繪本」『少女倶楽部』1936 年 10 月号、16 頁。
- 図 5 『少女倶楽部』1936 年 10 月号、表紙頁。
- 図 6 「女學生譜」『少女の友』1938 年 5 月号付録、2 頁。
- 図 7 「国民服運動に應へて“女子報國服”新たに登場」『東京朝日新聞』1938 年 11 月 9 日、朝刊 6 頁。
- 図 8 『少女倶楽部』1937 年 10 月号、四ノ B 頁。
- 図 9 『日本劇場ニュース』100 号、1937 年 11 月 21 日、頁数記載なし。
- 図 10 「今日のよき日」『少女倶楽部』1938 年 5 月号、頁数記載なし。
- 図 11 「読者のカメラ」『写真週報』1938 年 11 月 9 日、22 頁。
- 図 12 「旗の波」『写真週報』1938 年 11 月 9 日、6-7 頁。
- 図 13 「かゝやく紀元二千六百年の建國祭」『少女倶楽部』1940 年 4 月号、6-7 頁。
- 図 14 「梅の佳節に榮えて 帝都は奉祝の一色 日の丸の氾濫・建国祭」『東京朝日新聞』1937 年 2 月 12 日、夕刊 3 頁。
- 図 15 『少女倶楽部』1940 年 12 月号、頁数記載なし。
- 図 16 『アサヒグラフ』1941 年 2 月 5 日、25 頁。
- 図 17 「學校生徒ノ制服統制ニ関スル件」文部大臣官房文書課編『文部省例規類纂』1941 年、36 頁。
- 図 18 『赤十字博物館報』第 26 号、日本赤十字社、1942 年 9 月、111 頁。
- 図 19 『赤十字博物館報』第 26 号、日本赤十字社、1942 年 9 月、78-79 頁。
- 図 20 『赤十字博物館報』第 26 号、日本赤十字社、1942 年 9 月、221 頁。
- 図 21 「敢闘する女子挺身隊」『アサヒグラフ』1944 年 6 月 28 日、6-7 頁。
- 図 22 『少女倶楽部』1944 年 1 月号、表紙頁。
- 図 23 『少女倶楽部』1944 年 10 月号、表紙頁。

(わたなべ・ともみ 早稲田大学文学研究科 博士後期課程)